

## 誌上ギャラリートーク

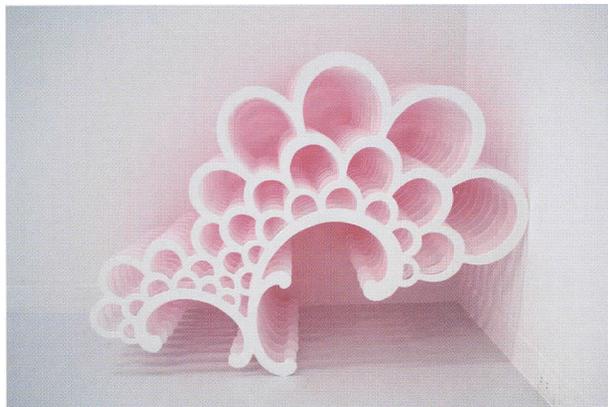
## 展覧会のみどころ!

### 第3期常設展「うつろい —アートディレクター篠原資明キュレーションによる—」

2014年8月23日[土]～10月19日[日]

今年の4月より高松市美術館アートディレクターに就任した篠原資明・京都大学教授自らが、当館の数多あるコレクションの中から11作家16作品を選びすぐった今回の常設展。テーマは「うつろい」です。

「うつろい」という言葉は、「移ろひ」と書くように、遙か昔から次第に変化することを表してきました。世の中は日々変化しています。氷は溶け、雲は流れ、花は咲き、潮は満ち引きを繰り返す…、そういった変化を形づくった作品が集まりました。



西山美なコ《Untitled》2007-08年 高松市美術館蔵

一言に「うつろいがテーマです」と言っても、その表現方法は作品によって様々です。雲や花などの自然や人の心、時間のように「うつろい」が描かれているものもあれば、ドライアイスやナフタリンを用いた「うつろい」もあります。また、映りこんだ自分の姿や影、音など、作品に触れる皆様方一人ひとりによってもたらされる「うつろい」に出会うこともできるでしょう。他にも、色そのものや色彩の変化から「うつろい」を感じさせる作品も見つかるはず。西山美なコさんの《Untitled》という立体作品は、裏面に塗ったピンク色が壁等に反射することでほのかな色彩を放っています。見る者に可愛らしさだけでなく、儂さをも感じさせる作品です。ぜひ、皆様の日常にあるささやかな「うつろい」に思いを馳せながらお楽しみください。

[片山加菜]

### 第4期常設展「美のパサージュ —20世紀フランス美術と日本—」

2014年10月25日[土]～12月27日[土]

「第4回日仏自治体交流会議」(10月28～30日、於高松市)の開催を記念し、20世紀にフランスで活躍した作家による作品と、フランスと関わりのある日本人作家による作品の数々を紹介しします。出品予定作家はピカソ、ブラック、マティス、デュシャン、エルンスト、藤川勇造、猪熊弦一郎、木村忠太、岡本太郎などです。ここでは渡仏した香川ゆかりの画家・猪熊弦一郎のフランス滞在時の作品をご紹介します。

猪熊弦一郎は1902年高松市に生まれ、東京美術学校で絵を学んだ後、帝展、そして仲間と共に立ち上げた新制作派協会を舞台に活躍し、1938年から3年間、憧れのフランス、パリで留学生活を送りました。マルセイユまで船で40日間かかる、フランスが今よりも遥かに遠くにあった頃の話です。猪熊は渡仏前からすでにヨーロッパの新しい美術動向を参照していましたが、滞欧中は、フォービズム、キュビズム、シュルレアリスム、抽象など当時パリで花開いたモダンアートの数々を吸収し、猪熊の絵画にもいっそう多彩なスタイルが現れるようになります。

《ジプシーの子供達》は画家がパリに住み始めて1年が経った頃に描かれた作品です。リーダー格と思いき年長の男の子をセンターに、様々な年齢の子ども達が身を寄せ合い、静かに前方を見つめています。面の集合により画面を構成させる手法はピカソのキュビズムを想起させますが、差別と迫害の中でたくましく生きるジプシーの子ども達に共感を寄せながら描くその姿勢は、ピカソが貧しい人々の姿を描いた「青の時代」の作品にも通じるものがあります。センターの男の子が手前左の女の子の肩に手を添えるその優しいしぐさが印象に残ります。

[高松市美術館学芸員 牧野裕二]



猪熊弦一郎《ジプシーの子供達》1939～40年  
高松市美術館蔵

5/1

しびの一と28号発行

5/11

ワークショップ「みんなで作ろう！ツクモ神！」

(講師：絵描鬼・柳生忠平氏)

アシスタント

今回のワークショップは役目の終わった道具を自分が考えた「つくも神」にします。では「つくも神」とはどんな神様なのでしょう。講師の柳生忠平さんによれば、昔々生活に使う物や道具は百年たつという妖怪になるという言い伝えがあり、その前の99年目で捨てなければいけなかったのです。長く使ったものや生き物は靈魂が宿るという考えがあったのです。「つくも」は「九十九」と書きますね。柳生さんは妖怪をモチーフに絵を描いているアーティストで、子供の頃は「ゲゲゲの鬼太郎」が大好きだったそうです。みんなで江戸時代に描かれた妖怪画も見たので、子供たちの「つくも神」はすっかり妖怪になりました。壊れた傘、小さくなった長靴、使わなくなった筆箱、ちり取り、フライパン等々家にある役目が終わった道具に色を塗ったり顔を描いてみたり、名前やいつどこに現れるのか何をするのか、お話まで作りました。

[三好ひさこ]



5/27～6/22(会期中、毎日曜)

特別展「高松コンテンポラリーアート・  
アニュアルvol.04 リアルをめぐって」

ギャラリートーク

5回目となる今回のアニュアル展、大変インパクトのある4人の作家それぞれの個性が光る展覧会だったと思います。まず、橋爪彩さん。女性だけを描き、しかもその顔は見せない。それでいて官能的な、写真かと見間違ふようなリアルな画面に、女性特有の毒を感じたのは私だけではないでしょう。大西伸明さんの作品のリアルさにも驚かされました。脚立、ドラム缶等、どれも言われなければそれらがプラスチック樹脂で作られているなんて思えない程本物そっくり！！小沢裕子さんの作品は映像について疑問を投げかけるものでした。そして真打は、何といっても石黒浩さんの「米朝アンドロイド」。人間国宝の技をアンドロイドとしてリアルに再現したものです。気持ち悪い程人間らしいアンドロイドに将来への期待と不安を感じてしまいました。

[植松紀子]

図版キャプション/  
米朝アンドロイドと桂米園治氏

6/1

ワークショップ「写実絵画入門」

(講師：美術家・橋爪彩氏)

アシスタント

講師はアニュアル展出品作家の橋爪彩さんです。橋爪さんは女性の身体をモチーフに油彩で現代の「リアル」を描いています。ワークショップは写実絵画入門ということで、りんごをデッサンしました。参加は小学生から大人まで。小学生はデッサンが初めてのようでした。使う鉛筆は4Bでまず芯を長く出るように削り、描きやすい角度をつけるためにサンドペーパーを当てます。角度がよくわからない子供たちは芯をこすり過ぎて、どんどん短くしてしまい、また削り直しということになってしまいました。鉛筆の持ち方も字を書くようには持たず、斜めに寝かせるように持ちます。デッサンは線で描かず、面で描くのだそうです。他にもりんごをよく見ることや、影をつけ、輪郭の際(きわ)を明るくするなどを教わりました。練り消しゴムで余分なところを消している子供の姿は美大生のようなでした。

[三好ひさこ]



2/18～3/23(会期中、毎日曜・祝日)

特別展「没後50年 磯井如真展」

ギャラリートーク

私は、数ある高松市美の漆芸作品の中でも、磯井如真の作品が大好きである。一際光彩を放っている。出品作品を見渡して驚くのは、意匠のモダンさとバラエティーの豊富さである。ギャラリートークの下敷きとして、如真の歩んだ道を熱心に読み進むと、「生き方=作品」であった。写真で見る如真の飾らない風貌と、ピクニックの超可愛らしい絵柄の間のギャップも実に微笑ましい。底知れない魅力と強い信念を持った人物であればこそその作品群である。そこには、漆独特の上品で奥ゆかしい美が、あの手この手で表現されており、天才の作品が凄いのは、制作にどれだけの手間や苦勞があったか知れないのに、作品には「作る喜び」しか見えない事である。NHK「日曜美術館」で知り、大阪から市美に来館下さった方がとても素晴らしいと感激しておられた。

[合田笑子]



3/9 ワークショップ

「椅子を置く／音を置く—インсталレーションであそぶ—」

(講師：美術家・藤本由紀夫氏)

アシスタント

「椅子を置く」って何だろう？…と会場に行ったところ、まさにたくさんさんの椅子。何が始まるかと思うと、特に何の説明もなく「おのおの椅子を好きな場所に置いて下さい」との指示。皆それぞれ色んな場所に色んな風に置きました。それを眺めた後、藤本氏の話が始まります。常識的に置いた人、あらぬ方向に向けて置いた人、椅子としては機能しない逆さまに置いた人…そういう結果になることを藤本氏は完全に予想されていたようでした。つい奇をてらった置き方などを考えてしまった自分がすっかり見透かされていて恥ずかしくなりました。そう言えば子供の頃、どのクラスにもこういう色んなパターンの子がいたよなあ、とまるで人間関係の縮図を見ているようでした。次はサイコロで椅子を置く場所・向きを決め、その椅子に実際に座ってみました。ちょっとした置き方の違いで得られる心地良さ・悪さというものを実感しました。最後に現れたのが、藤本氏特製、手のひらサイズのリートフェルトの椅子…グループに分かれて、1m四方の枠にミニチュア椅子を置く、サイコロで位置を決めて置いたのに、どちらのグループの構図も妙に似通っているのが不思議でした。含蓄のある藤本氏の話は心理学の講義を受けているようで、美術を楽しむにも素直な心が大切なんだ、と生き方の基本を学んだ気がしました。

[池田幸子]



3/22

香川県善通寺市「こどもとおとなの医療センター」見学

4/11～5/18(会期中、毎日曜・祝日)

特別展「北原照久コレクション」

現代アートと時代を映すおもちゃ展」

ギャラリートーク

北原照久さんのコレクション展と聞いてほとんどがブリキのおもちゃだと思ったわたし。いえ違いました！北原さんは現代アートのコレクターでもあったのです。今回わたしたちがトークで紹介した現代アート作品は、北原さんの大好きなおもちゃをモチーフにしたもの、あるいは特別なパワーを発しているものなど、北原さんの夢とロマンと愛と「第六感」の詰まった大変魅力的なものでした。けれどわたしが一番魅了されたもの、それは素直で前向きで正直で屈託のない北原さん自身。若さを保つ秘訣を垣間見たような、ちょっとお得な展覧会でもありました。

[坂口弘子]



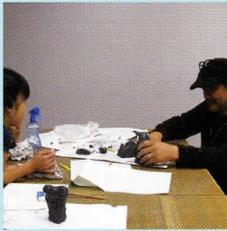
8/2

### ワークショップ「粘土で動物をつくろう」

(講師：彫刻家・三沢厚彦氏)

アシスタント

等身大の動物達の木彫「ANIMALS」で知られる三沢厚彦さん。ワークショップのテーマは、粘土で自分の作りたい動物(生き物)を作る事。参加者(子ども達)は、まず作りたい動物などを紙に描きます。しっかりと紙の上に描いていくと、作りたい物のイメージが大きく膨らんでいくようでした。そして、陶芸用の粘土で思い思いの形を作り出していく。すると、四角い粘土の塊から動物に形を変える瞬間があって、自分の作りたい形に変化すると子ども達のやる気はヒートアップ！その人にしか作り出せない魅力的な動物達が生まれました。基本的に人は、私を含め…土いじりや粘土遊びが好きなんだと実感。後日、粘土の動物達は無事に焼き上げられて作者のもとに帰って行きました。 [佐々木真理子]



6/1

### ワークショップ「石膏型取り入門」

(講師：美術家・大西伸明氏)

アシスタント

石膏型取りというと、手や耳などの形を再現したことはあったのですが、今回は石膏を握った形をオブジェにする！？という風なものになるのか興味津々でアシスタントしました。まずは生クリームの絞り袋の先に風船をしかりと固定し、そこへ水によく混ぜた石膏を流し込みます。そして時間を見計らって手で風船を自分の好きなように握ったり押ししたりして固まるのを待ちます。サラサラの石膏が少しずつ固まって行く様子やだんだん熱を発して暖かくなるのは何とも不思議で面白い現象です。固まったオブジェはカラフルで様々な形をしていました。この作品はどのように握ったんだろう？と謎解きする時間も楽しかったです。 [田中えり子]



8/2

### 美術館の日

#### ワークショップ「ふらっとアート」

アシスタント

今年のふらっとアートも気軽に参加できる簡単な工作コーナーを企画しました。その中で今回新たに試みたことが、高松市民病院の人にプレゼントするために作品を作ってもらうことでした。そのきっかけとなったのは、近年当館と交流のある「四国こどもとおとなの医療センター」におけるホスピタルアートの活動です。今回はプレゼント作りを通して病院と地域の皆さんの交流になればという思いで、参加者に2種類の工作から自分へのお土産用と病院へのプレゼント用の計4つの作品を作ってもらいました。「ハンカチに動物をスタンプしよう」では白地のハンカチにサツマイモやゴーヤなどの野菜を使って動物やいろんな模様をスタンプしてもらいました。「動物型マグネットを作ろう」は厚紙にビーズをデコレーションしたり、色鉛筆でイラストを描いたりして最後にマグネットを貼り付けて出来上がりです。今年の美術館の日は雨にも関わらず、本当にたくさんの方たちが来館し、ふらっとアートも300個以上のプレゼントが集まりました。たくさんの方の励ましのメッセージとプレゼントは大切に病院に届けます！

[高松市美術館 翠さやか]



6/8

### 子どものアトリエ「アフレコされてみよう！」

(講師：美術家・小沢裕子氏)

アシスタント



アフレコというと、洋画やアニメの声の吹き替えを思い起こしますが、今回のワークショップは、参加の子供たちの映像に大人の声をアフレコするというものでした。講師の小沢裕子さんビデオカメラで、子ども達一人ずつを撮影しながら質問をしていきます。「好きな場所は？」「大人ってどんな人？」ぶっつけ本番の子ども達は瞬間的に考えて答えます。その答えを、大人(と中学生)達が、セリフのようにアフレコ作業していくのです。「私ってこんな声だったの～！？」どころではない、明らかに別人の声が、自分の口から発している。私なのだけ私ではない、この不可思議さ。「私」って何だろう？編集された映像を見て、参加の子ども達はどんな感想を持ったのでしょうか。・・・大人の私としては、アフレコの難しさは言うに及ばず、ワタシのヘンな声になってしまった子どもが傷ついただろうなーと、申し訳ない気持ちのワークショップでありました。 [堀本真弓]

7/11 ~ 8/24 (会期中、毎日曜・祝日)

### 特別展「三沢厚彦 ANIMALS 2014 in 高松」

ギャラリートーク

1F エントランスに巨大なワニと白サイ現る！美術館が動物園と化した展示会「ANIMALS 2014 in 高松」は、大人にも子供にも大人気。三沢さんにより樟(くすのき)から彫り出された動物達はどれも個性的、図鑑のデータを元に実物大で制作されていて大きいものだと1年がかりだそうです。展示室を朝→昼→夜と時間軸を表すように段々暗くしたり、壁から手長ザルがぶら下がっていたり空間構成担当の豊嶋秀樹さん(gm projects)とのコラボにより楽しさも倍増！展示室を進む毎に次は何があるのかな？と皆さんワクワクされていたようです。全国で開催されているANIMALSでは各地に縁のある動物を制作するのが習わしで、高松では愛らしい狸が新作として登場しました。樟と檜の木の香に包まれたステキ☆な展示会でした。

[木村真由美]



8/9

### ボランティア定例会にて篠原ディレクターの話を聞く I

(生い立ち、研究、詩作等について)

9/6

### 第3期常設展ギャラリートーク

(高松市美術館アートディレクター 篠原資明) 参加

9/6

### ボランティア定例会にて篠原ディレクターの話を聞く II

(日本の現代美術作家について)

## 第3回

### 復活！わき役のひとりごと。

こんにちは。〈私〉はご主人様に描かれている作品の一部です。〈私〉が描かれている作品は発表された時から注目を浴びてきました。皆さんも〈私〉達をご覧になったことがあるのではないのでしょうか？と、言っても注目を浴びたのは〈私〉ではなく、〈私〉のそばにいる女性です。一見普通のピクニック(?)の風景なのに、なぜか裸体でそばにいる女性、彼女が裸体で描かれたために衆目の関心を受けることになりました。それまで神話の題材の中で描かれてきた裸体が日常風景に描かれたた



エドゥアール・マネ「草上の昼食」  
1862-63年 オルセー美術館蔵

め、中には「下品だ」と中傷もされました。皆さんはどう思われますか。当時の大勢の意見ではあまり受け入れられませんでした。一部の方には大胆な配色や塗り方、神話にたよらないモチーフが支持され、〈私〉のご主人様の元には若い芸術家の方々が集まるようになりました(エッヘン!)。現実をありのままに、大胆な技法で描いた事は皆様ご存知の通り、印象派の引き金になりました。〈私〉を描いたご主人様は凄いですか？さて、いまさらですが〈私〉はどこに描かれているのでしょうか？絵の題名にもなっているのにまったく注目されなかった草？それとも広げられたまま手も付けられず忘れ去られている昼食？いいえ、〈私〉は女性のすぐ後ろで日陰を作ってあげている「樹」の一本です。仲間達と一緒に画面の多くを占めています。〈私〉達は黙って色々なものを見守っていますよ。 [石床亜希]

かけはし  
**リエゾンとしてのアート**  
 一四国子どもとおとなの医療センターをたずねて

高松から車で約1時間、善通寺市内に入りしばらく進むと、ハートの実をたくさんつけたカラフルな樹の絵を壁全体にあしらった愛らしい建物が視界に入る。「四国子どもとおとなの医療センター」である。筆者が勤務先のボランティア研修旅行の随行としてこの病院を訪問したのは、2014年2月下旬、同病院において全ての機能の整備が完了し、グランドオープンを迎える前日のことであった。庭などの造成が急ピッチで進められる慌ただしい雰囲気の中、玄関で私たちを出迎え、施設案内をしてくれたのは、旧香川小児病院におけるホスピタルアート導入時から同事業のコーディネートを一手に引き受けてきた森合音(あいね)氏と、アートサイコセラピストとして同病院に勤務する美術家の森かおり氏。

病院に足を踏み入ると、エントランスや廊下のいたる所にドローイングやインスタレーションが設置されている。絵本を思わせるソフトなタッチで、風景、植物、動物などが描かれた作品が多く、全体として人々を包み込むような優しい雰囲気にあふれている。もっともこのように書くと、弛緩した生気に乏しい空間がイメージされるかもしれないが、実際にはその真逆で、個々の作品は自身の魅力をしっかりと主張し、それぞれが響きあって、生き生きとした心地よい空間が作り出されている。

森合音氏が同病院のホスピタルアートに関わるようになったきっかけは、2008年旧香川小児病院の思春期病棟の壁画制作をひょんなことから院長に依頼され取り組んだことであった。地元善通寺にある樹齢千年以上のクスノキの絵を画家と相談して考え、その原画を患者や職員ら多くの人々とパッチワークのように少しずつ描いていった。すると、子供たちが殴る蹴るして壁に穴をあける行為はぴたりと止んだという。以来、アートプロジェクトは他のエリアにも広がり、新病院においては設計段階からアートを取り入れた環境づくりが行われ、一層の充実ぶりを示しながら展開していった。

「ホスピタルアートは患者、医療者、アーティストといった人々がみんな考えて、話し合い、共に作り上げていくもの。私たちの仕事は病院に集うこれらの人々をつなぐこと」と森氏は語る。そこにいる人々の思いや願いが、コーディネーターの仲介を通して作品に反映される。だから、どのスペースに飾られている作品も取ってつけたような感じがせず、しかるべき場所で伸び伸びと呼吸をしているのである。

紙幅の都合により作品紹介は1点だけとしたい。各フロアの廊下などいたる所に点在する「ニッチ」と名付けられた作品。これは壁の窪みに作られた飾り棚に月替わりで季節に対応した小さな作品が飾られ、傍らにある小さな扉を開けると、中に豆本や折り紙などの贈り物が入っていて、誰でも受け取ることができる、というもの(花も週替わりで飾られている)。小さなスペースでありながら、病院で過ごす人、あるいはそこを訪れる人が作品や贈り物を通して心を通わせることができる、魅力的なスペースである。「患者、医療者、アーティストをつなぐ」ホスピタルアートそのものを象徴するプロジェクトであるといえよう。その他の作品は、現地もしくは病院ホームページでご確認いただきたい。

ホスピタルアートは多くの人が共に作り上げるものであるが、だからこそそれをコーディネートする人物の働きが重要になる。アーティストと人々をつなぐこと。そしてそれらの人々に思いをはせながら空間を作り上げていくこと。このようなキュレーションの基本事項を私は満足いくかたちで遂行できているだろうか? 同病院における見事なキュレーションを目の当たりにし、キュレーションの原点について考え直したいと思った。

[高松市美術館学芸員 牧野裕二]

\*『ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.6』(2014年8月1日発行)に発表した原稿を修正して掲載。



廊下にある「ニッチ」プロジェクト。



病院の庭。手前はイケムラレイコによるブロンズ像。

## 編集後記

◎最近仕事に追われ、ゆっくり美術館巡りをする時間もありません。久しぶり(?)に美術の世界に思いを巡らし、少し癒された気分です。心身の安息のために、文化・運動両面からのストレス発散が大事だと改めて思いました。絵の選定に少し悩みましたが、シビ結成当時を思い出し、懐かしい思いのなか筆が進みました。(印象派の展覧会が私にとってシビの記念すべき初ギャラリートークだったので) [石床亜希]

◎金沢21世紀美術館に行ってきました。レアンドロ・エルリッヒのからくり作品はまさにあの美術館にぴったりでしたが、他の多くの作品も現代美術をあんなに楽しく開かれた形で紹介できるというのは、高松市美術館との感触の違いを感じました。帰りに歩いた金沢の裏道が情緒があって素敵でした。 [池田幸子]

◎先日東京で開催されている、「ボストン美術館展」に行きました。印象派の画家たちを魅了した日本の美、中でも浮世絵のすばらしさに本当に驚きました。本物の浮世絵を見たのは、(日本人なのに)初めてでした。その藍色の深さ、構図の面白さ、いくら見ても見あきない程です。江戸時代にこれほどの作家たちがいたことに、誇りを感じました。 [植松紀子]

◎9月9日、十六夜はスーパームーン。あんなに明るい月をじっくりと見るのは初めてで感動しました! 月ってあんなに明るくなるんですね。 [片山加菜]

◎動物の名前にちよっぴり詳しくなりました。岩手の新作「火の鳥」が気になります。 [木村真由美]

◎トラッドファッションがよくお似合いの北原さんですが、若かりし頃は、

相当やんちゃしていたそうです。コレクションはロマンチックでも、それを集め続ける努力と忍耐! やはり、ただの「爽やかなおじさま」ではないんですね。 [坂口弘子]

◎秋は私にとって、一番心ときめく季節です。特に、秋の夜空に浮かぶ月を眺めると心が癒されます。この秋は、中秋の名月や重陽の節句である9月9日の満月(スーパームーン)もパッチリ観賞できて幸せな気持ちになりました。 [佐々木真理子]

◎どんどんパワーアップしていくアニュアル展!! 今回の4人のアーティストの際立つ個性たら...!! 今後の活躍を見ていくのが楽しみです。特に、しなやかに美しい女性アーティストたちに年甲斐もなく憧れております〜。 [堀本真弓]

◎定例会での篠原ディレクターの話は良かったです。展覧会のトークは作家のことだけを掘り下げるので、アート全体を見渡したり、歴史的に振り返るなどということは考える機会がなかったの、そのお話は貴重な体験でした。 [三好ひさこ]

◎高松市美術館は閉館26年目を機に、2015年1月から改修工事に伴い長期休館に入り、16年3月にリニューアルオープンの予定です。休館中、シヴィのみなさんに特別展のギャラリートークをしていただくことはできませんが、毎月の例会に加えて、研修や出張講座のアシスタントなど、休館中だからこそしてもらえる活動もいろいろあるかと思えます。記念すべき、しびの1と次号第30号が出る来年4月は改修工事真っ只中のはず。工事進捗状況のレポートでもしたいと思います! [高松市美術館学芸員 牧野裕二]